慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・ラスキンの奢侈論（二、完）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.6 (1922. 6) ,p.803(63)- 823(83)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220601-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

暴力の問題である。ロシア共産主義者は社會主義革命における暴力を最重要視し、レニンの如きは暴力革命の思想はマルクス、エンゲルスの根本思想であると主張する。暴力革命に關する論述こそ、「マルクスよりレーニンへ」の中の最も興味ある部分である。ヒルキットは、社會主義運動を三期に分つて、權力獲得準備時代、權力の獲得、並に權力の防衛の時代に分つてゐる。さうして權力防禦の時においてのみ暴力を必要とすると主張する。マルクス、エンゲルスは嘗てバクーニン流の行爲の宣傳を斥けた。（九四頁）けれども新社會が舊社會の胎内に宿つた場合には、暴力なる産婆を必要とすると云つたが、（九六頁）マルクス、エンゲルスはこれを立證すべき何等の歴史的事實をも有してゐなかつた。（同頁）然るに社會主義革命即ち無産階級による政權の奪取は、フィンランドにおいても、獨逸においても、オーストリア、ハンガリーにおいても、パリ・コンミュンにおいても、何等の流血の慘事を見ずして行はれたのであつた。（九六―九頁）然るに社會主義革命に對するブルジョアジーの反革命運動は甚だ強力であり、暴力的である。故にこのブルジョア反革命を抑壓する防禦的の意味においての暴力は、これ事情止むを得ざるに出づるものである。ロシア革命の繼續は實に當時における反革命運動の絶對抑壓のための赤衛軍の存在してゐたことによつてゐる。

ロシア革命家は、その革命に引き續いて世界各國の革命を豫期した。けれども世界の革命は共産主義者が豫期した程に、速かに來ることが出來なかつたのである。ロシア革命はこゝにおいて、資本主義國家を四圍に持つ社會主義國家となつた。世界革命の豫想を懷いた共産主義者の態度は甚だ困難を伴つて來た。資本主義國家を四圍に持ち、その生産力が甚だ優秀でないロシアは四圍の資本主義の經濟勢力を借るの必要に會した。外交政策の變更通商關係の要求は、その必然の結果である。（第十章）たゞこれを以て直ちにボルシェヴィズムの資本主義への降伏と云ふは甚だ誤つた觀測と云はねばならない。それは國家社會主義又は國家資本主義の採用である。

私は讀後の感想にあまり多くの頁を費し過ぎたやうである。それはヒルキットの著書が最良と信じたからでは勿論ない。たゞその内に論じられてゐる問題が甚だ重要なので、餘り略筆を用ゐることが出來なかつたからである。ヒルキットの書はこの社會主義革命の重要問題に對する一の教科書、一の手引に相當するものである。

ジョン・ラスキンの奢侈論（二、完）

奥井復太郎

三

自己所有の財に就いて何人も一方には非常に嚴肅なる排他的權力を有すると共に他方には頗る自由なる其の處分權を享得してゐるのが現在社會の財産制度の原則である。故に個人は極めて狹い範圍の制限――多くは法律的の――を除いては自己の富を如何なる方面に如何なる方法で以つて使用するも何等妨げないのである。假令他に社會的の又は倫理的の制限が富の放縱なる使用に對して加へられる事があつても現在の社會に於ける富の權力は此の種の非難を壓倒し以つて自己を是認するに充分である。否、更に

一歩を進めて如何なる方法による財の費消も其が此の社會に於いて一定量の勞働を支配し勞働者に其の生活の途を給與する點に於いて大なる利益を及ぼすものであるとさへ說明せられてゐる。かゝる見解に對してジヨン・ラスキンが如何なる反對を企てたかは前號に於いて述べた所である。ラスキンの此の點に關する主張は The Metaphysical Society の會員であつた W. R. Grey 氏 William Rathbone Greg, 1809-1881. 英吉利の神學者にして又哲學者）の所論に對する彼の質問に於いて窺ふ事が出來る。此の顚末は一八七二年十二月號の Contemporary Review に掲げられた Goldwin Smith（1823-1910 英吉利の批評家であり且つ哲學者たりし人）と云ふ人の "The Labour Movement" と題する一論文の所論に對して加へた Grey 氏の主張にラスキンが質問を試みたのである。スミス氏の「勞働運動」の中に述べた所說は富豪が勞働者の所得を掠奪して豪奢な生活を送つてゐると云ふにある。

『現代の英吉利に建設せられつゝある樣な人目を奪ふ豪奢なる奢侈の宮殿は、いつ富が建てたものであらうか。私は此の樣な宮殿の一つに就いてよく記憶を有する其は數哩四方に亙つて最も目立つてゐたもので、其處の主人と云ふ者は彼の周圍に居る數百の貧乏な勞働者の家族の收入を消費してゐたと云ふ事を私は斷言し得る。六百の勞働者の家族の收入を年々自己の用の爲めに費してゐると云ふ考は一つの心情あり腦髓を持つた人間の到底我慢する事の出來ぬものの樣に私には思へる』。

之れに對する W. R. Greg 氏の所論は『あらゆる冷刻なる富の費消も凡べて貧乏なる家族の懷に入る』ものであつて從つて彼等は宮殿の中に納つた富豪の我慾的な奢侈によつて利益せられるのであると說いてゐる。（The Editor's note to "Letters on 'How the Rich spend their Money,'" in "The Complete Works of John Ruskin," edited by E. T. Cook, vol. xvii.）

前號に掲げた富豪の奢侈的生活に就いてラスキンが謬論と唱へるものは恐らく以上の Grey 氏の所論を指すのでは無からうか。又ラスキンはかゝる謬論を代表するものとして別の所論を一八五七年十一月二十三日のタイムス紙上から引き拔いてゐる。其は紐育の市會議員に依つて說かれたもので之れに據れば贅澤な生活が一國の災害となると云ふのは誤つた議論である。百萬弗の財產を持つた人間が拾年間に元金も利息も皆消盡してしまつたとし其の時に彼が乞食になつたとしても彼は彼の贅澤な生活を賄ふて呉れた百人の人間を其の財產の分けられた丈け富ませた事となる故に彼は破滅したらうが一國は其の爲めに害を蒙つてはゐない寧ろ一萬弗づゝ各自に持つた百人の人間は一人が全部を占有してゐる場合よりも遙に生產的であるからして一國は爲めにそれ丈け富裕になりうるのであると。（A Joy for Ever, § 138, Note 5th in Addenda, foot note.）

右に對するラスキンの駁論は極めて單純である、即彼はかゝる場合には一國として一百萬弗に値する勞作と拾年と云ふ年月とを費して其の結果一人の乞食を生み出した。『何んと云ふ結構な經濟であらう』小遣錢を買つた小供が買喰ひをしすぎて醫者の厄介になつたのと同じ事である。菓子屋が儲けたと云ふのはいゝ。が其の小供が口腹の慾を滿して跡に病氣の外に何物も殘さないのに對して更にもつと有益な小遣錢の使用を知つてゐる小供がある。彼はそれと同額の金で本や小刄を買つた、そして小使錢を使つて了ひ又本屋が儲けたといふ點は前の小供の場合と同じである。然し前の小供と違ふ所は病床に就いて藥料を支拂ふ必要ないのみか後者は彼の持つてゐる本や小刄で他の學校友達に便宜を與へてやる事が出來ると（前揭書）。ラスキンの經濟論はかゝる簡單な言葉の中にも充分現はれてゐる。

グレエグ氏の所論に對してラスキンは Pall

Mall Gazette 紙の主筆に一月二十三日附（一八七三年）で手紙を送つて同十三日の同紙上のW. R. G. 氏の富の消費に關する所說に就いて質問を爲した。其の質問は彼は（ラスキン）『少し許りの金持であるが若し貧乏人であつたとすれば必ずW. R. G. 氏の所論が自分に一つの疑問を生ぜさせるであらう』としてW. R. G. 氏の解答を期待したものであつて其の內容は『此の寬大にして有爲なる紳士がかく幸福にも私に（貧乏人としてのラスキン）に與へて呉れ樣としてゐる生活の資料は――元來何處から彼自から得て來たのであるか』と云ふにある。（Ibid., The Letters on "How the Rich spend their Money."）然しグレエグはラスキンの質問を以つて「當問題の要點に關係」を缺くものとして彼の「惡賢こき質問」に答へなかつた（一月二十八日附手紙）。茲に於いてラスキンは自から「其の事實」を說明して『勞働に從事せる貧しき人々は彼等の勞働に依つて「生活の資料」を生產する。富める者は種々なる方便によつて是等の「生活の資料」を分配する權利を享得してゐる。そして彼等の望む丈けのものを或は其れ以上に及んで自分等の用に留めておいて常に僅かに後の殘り丈けを、此の富裕なる分配者の多種の快樂を生產する爲めに貧しき者に就いて遙か餘計に使用された、勞働に對して分配するのである』（前揭書一月二十八日附 Pall Mall Gazette 編輯者への手紙）かくの如くラスキンは奢侈を行ふ源である富の形成に就いて既に大なる疑念を懷いてゐるのである。即ち一月三十一日の同紙上のラスキンの手紙は彼自身の財產の形成せられた事に就いて語つてゐる。グレエグ氏の云ふ富裕なる者或は彼等の祖先は貧しき者との協力で其の財產を蓄積した如くにラスキンの父親並びに其の仲間は「相互に利益のある組合」を西班牙のある勞働者達と結んだ。其の勞働者は年々地より幾許かの葡萄酒を生產した。ラスキンの父及び彼の仲間は其れを販賣して彼等自身に其の價格の十分の九程をとり是等勞働者には十分の一位丈けを與へた。此の「相互利益の形式で」ラスキンの父及び其の仲間は當然富裕となり是等勞働者は同じく當然貧困に留まつた。此のよき父親は「生涯に於て自分の使用する鹽にさへ値する丈けの僅かな勞働をも爲さぬ」ラスキンに其の財產を皆與へた。然も其の財產は彼の手にあつては「成長」する事なく之れに依つて何物を購買する事もしなかつたのに人々は、彼に「貨幣も今では父上のおゐでの時とは丸で違ひました。凡べての物が皆非常に高くなつてゐますから」と敎へた。故にラスキンはグレエグ氏に彼の貨幣を成長せしめるをうる貨幣植物學（pecuniary botany）を敎へて貰ひたいと說きそして「勞働者と相互利益の組合を結び其の利益の均半分を貯蓄して財產を作つたと云ふ富裕なる紳士の生きた實例を示せと要求してゐる。

附記　以上のラスキンとグレエグ氏との交涉は彼の Fors Clavigera, Letter 60 に簡單に述べられてゐる。

筆者は富の形成に就いてラスキンの觀察に深入りする事を避ける。何となれば其は又別の機會屬す可き問題であるから。唯、彼が奢侈の行はるゝ場合には既に富の形成に就いて貧しき者に對する罪惡が行はれてゐると云ふ主張を懷いてゐるのを說明して置けばいゝ。即ちラスキンに從へば『何人も單に勞働と經濟とによつて非常に大なる富豪となつた者もなければ又爲り得もしない。凡べて大なる財產は土地の占有か高利を貪るか或は他人の勞働に課稅するかに因るものである』と。（"Home, and its Economics", in

the Contemporary Review, May 1873, vol. 21; Complete Works of J. Ruskin vol. xvii)

商業的富の蓄積は一方に於いて忠實なる勤勉進歩的活動、生産的創意の存在を示しうる事もあるが他方に於いては其の極端なる奢侈、無情なる暴虐、亂暴なる奸譎の存在を示すものである。(Unto This Last, § 37)

四

ラスキンに依れば人間の勞働が正しく適用される場合には自然は人類に充分の必要品や娯樂物や且つは豐富なる閑暇を與ふる樣に神意の法則に依つて支配せられてゐるのである。又反對に同じ法則の働きによつて一個人或は一國の勞働が其の適用を誤り或は其の勤勉に缺く所があれば其の不注意や懶惰に應じて不足や苦惱が結果するものである。故に缺乏、不幸、罪惡は決して人間の必然的本性の結果でもなければ偶然の出來事でもなく天命の災難でもない。たゞ勞働す可き時に放逸に流れ服從を旨とす可き時に我意に趨るが爲めである。

『現在この文明的な歐羅巴に存する苦惱や罪惡の極く大部分は唯だ人々が此の分明過ぎる程明白な眞理を理解しない爲めに生じたのである。即ち生産物又は富は天と地との法則に依つて永遠に不撓不屈の勞働と結び付けられてゐると云ふ事を知らず唯だ或る方法に依つて此の生活の永久的法則を胡魔化し或は廢棄せん事を望み更に彼等自から耕作せざる所に食し自から紡がざる所に於いても暖衣を求めん事を望むでゐるのである』(The Two Paths, § 176.)、

之は洵にラスキンの勞働搾取說とも云ふ可きものゝ前提であるが現在本稿の目的は寧ろ奢侈が何故に社會に於ける他の多くの人々の生活を窮迫せしめるかを說明する事にあるが故に、茲には「自然の法則は、吾人の欲する如何なる種類の物でも其の一定量を生産するには必ず一定量の勞働を必要とする、と云ふ事である」と述べて置くに止まる。然るに人々は此の法則を認めない或は此の法則を脫れて何等勞働なくして自分等の欲するものを得んと努める。其の結果はかゝる愚鈍な計畫に失敗するか或は自分等の利益の爲めに他人を働かせて其の目的を達するに至るのである。斯くては彼等は暴虐なる君王であり又盜賊にも等しいものである。十九世紀の文明が人類に及ぼした有益なる多くの功績を疑はなくとも、富の欲求に於いて吾人が不正直であり兇惡であるのに對してかくも冷淡に構へてゐると云ふ事が吾々に關する此の世紀の非常に暗黑な象徵の樣に思はれるとラスキンは叫んでゐる。(同上第一七七節)

故に個人又は國家の富の形成は右の如く他人の勞働の成果を掠奪する事によつて其の一方法が求められ得る。(同上第一七八節以下參照)

斯くて富裕にならんとする現代の人々の焦慮が明かに且つ絕えず年々吾々の手を以つて幾多の人命を奪ふと云ふ確然たる結果を引き起すが(The Two Paths, § 189.) 更に蓄積せられた富は其の消費の方法の如何に因つて更に社會に於ける貧困なる者の生存を脅かし彼等を破滅の淵に陷し入れ樣とするものである。

ラスキンに從へば如何にして蓄積せられたる富も其の使用に就いて公正を得なければならない其は正しき勤勉によると又他の勞働搾取によるとを問はず富を所有する者がその使用に際して遵奉す可き律則である。況や社會の現實の現象として貧困と不幸と罪惡とが吾々の眼前に生起してゐる間は更にその律則の重要さを增すのである。ラスキンの言葉を敷衍すれば人類の奢

侈的欲望は眞摯なる人類の努力に依つて充分享樂し得らるゝのである、しかゝ其の場合には勿論人類の一部分が生活の必要品に缺乏して生存其のものを脅されてゐると云ふ事は有り得ないのである。故に奢侈と云ふ樣な性質の欲望滿足はあらゆる生活の完全に充足せられた時にのみ認められて初めて公正となるのである。然るに現在の社會は正當なる勞働の缺除と云ふ事及び勞働の搾取と云ふ事から生じてゐる貧困や不幸の夥しき現象に溢れてゐる然らば此の場合には社會の勞働は先づ正しく、かゝる生活の必要品を充足せしむるに足る可き生産に投ぜられなければならないこの義務は當然勞働を支配する權力のある者即富の所有者に歸せられるのである。彼がかゝる義務に顧慮する所なく自己の富を浮薄にして一時的なる奢侈享樂の方面に投じて其の爲めに生産者の勞働を固定する事となれば其の勞働は社會の窮貧を除去するに最も重要な生活の必要品の生産に投ぜられる事を妨げられ斯くて貧困なる者の窮迫は依然として彼等を脅してゐる事となる。上流婦人の用ふる華美なる衣裳に就いて論じたラスキンは此の種の奢侈の政治經濟的の意義を闡明にして次の樣な觀察を下してゐる。即ちかゝる奢侈的生活に依つて吾人は奴隷の主人と同樣の苛酷さを以つて空腹と寒氣との脅威を蒙る人々の勞働の一定量を一定期間内は自分等の權力の下に置きかゝる人々の勞働は一婦人の夜會や舞踊會に用ひられるレースや造花を作る爲めに投ぜられる。誠に此の勞働期間に於いて吾々は彼等勞働者の生活を扶持するかも知れないが其の間は彼等が他に如何に逼迫せる必要を有つも其の爲めに働く事を妨げらる。かくて他方に於いて幼さ小兒や病人を寒氣の内に惱ませ乍ら一方に於いて作られたレースや造花は要するに一時の使用に依つて消耗されてしまふのである。(A Joy for Ever, § 52) 即ち奢侈の享樂は其の爲めに需要せらるゝ勞働者に彼等の必要とする生活資料を供給するに非ずして寧ろ其を彼等より奪ふものである。是れ奢侈が貧困なる者を破滅させる最も廣汎にして且つ最も恐る可き方法となる (The Two Paths, § 189) 所以を示してゐるのである。

附記　奢侈が懶惰なる人間の他人の勞働を掠奪する事によつて成立すると云ふラスキンの主張は彼の Fors Clavigera, Letter 84 の中に於ても同樣論ぜられてゐる。

之れに對して辯護する者は貧困なる者の勞働を富裕なる人間の奢侈的享樂の方面に投ずる事は『決して特に慈悲深い事ではないし又吾々も其れを主張してはゐない。併し吾々は勞働者に賃銀を拂つてやつてゐるからして彼等の勞働を使用した所で其は惡い事ではなし又仕事に對して正規の賃銀を拂へば彼等の勞働に對する權利を持つてゐる筈ではないか』と主張するであらうがラスキンは斷然と之れを拒むのである。即ちラスキンは何人と雖も自己の時間、自己の勞働をさへ單に自分の利益の爲めのみに費す權利を持つてゐないと反駁する。(A Joy for Ever, § 52.) ラスキンの經濟論は消費の内容即ち其の道德性を心髓としてゐる。(See, "Lessons from Ruskin," by Charles S. Devas, in the Economic Journal, vol. viii.) 故に吾々の周圍に寒さや着物を持たぬ者が存する間は衣裳の華麗は人間に與へられた富の正しき使用に對して罪惡を構成すると云ふ事に何等疑問の餘地は在り得ないと。

故にラスキンは勞働者に向つて富者の奢侈享樂に對して羨望する事なく其が彼等富者に委ねられた權力の濫用である事の非を咎む可きであ

ると敎へてゐる。

『若し斯くの如くに（奢侈的に）費された貨幣が排水法や貧困者の爲めに愉快なる住居を與へる施設に或は單に眼の娛みになる丈けでなく同時に敎育的である裝飾を建築物に施すと云ふ樣な方面に用ひられたならば其は永久的な且つ有益な效果を齎すであらう。斯くして是等は富者に對する貧しき者の不平の源に達する事を得る。即ち若し貧しき者が富める者に向つて彼は馬車で乘り廻はしたり或は奢侈に耽けつたりする用を持つてゐないと叫んでも其れはうまい言ひ方ではない、何故かと云へば富者は自分の思つた樣に貨幣を費す權利を持つてゐるから。然し若し貧困なる者が富は神が富める者に與へたもので彼は其を同胞の利益を計る樣に分配しなければならないのであると叫べば其の抗辯は多くの注意を惹くであらう、殊に若し貧しき者が自分達の範圍内では其の義務を完全に果し其の地位を改良す可きあらゆる機會を利用してゐる事を示せば尙は更の事である』（An Address to the Workmen employed on the Oxford Museum, delivered by J. Ruskin on Friday evening, April 18, 1856. From Jackson's Oxford Journal of April 26, 1856. The Complete Works of J. R. vol. xvi）

富は既に述べた樣に人間の手に與へられた最大の權力の一つである。而て其は全人類により良き生命を確保せしめる爲めのものである然らば富の所有者は當然この權力の保持者として全人類の幸福を計る可き責務を負はねばならぬ。茲に吾人はラスキンが一度不正なる而して怠惰なる蓄財家と認めた富者に對して全人類の指導者と云ふ名譽なる地位を認めなければならぬに立ち到つたを知る。次に今興味ある此の點を詳述してみたい。

五

既に屢々引用したラスキンの "The Two Paths" は一八五七年同八年及び同九年の間にマンチェスタア、ブラッドフォード其他の場所で彼が講演したものを一八五九年に前記の表題の下に出版したものである。形式は個々の講演集であるが内容に至つては著者自から云ふ樣に根本的に統一した目的を有してゐるのである其の目的は藝術家が採る可き二つの方法即自然と云ふものを尊敬し愛好して其の美の眞摯なる表現に努力するか或はコンヴェンショナルな方法に止まつてしまふかと云ふ二つの方法に關して前者は藝術家の有するあらゆる能力の發展であるに對して後者は其の能力の死滅に急ぐものであると敎へてゐる。併し今茲に必要なのは其の中の第三講ブラッドフォードに於いて一八五九年三月一日に爲された「Modern Manufacture and Design" の一講演である。之は新らたに出來た School of Design の開校式に述べられたものでその會合は可成り其の地の名士を集めたものであつたらしい事は E. T. Cook 氏が其の編纂の全集第拾六卷の緒論中に Bradford Observer 紙から引用した其の記事に依つて判斷しうる。（併し茲に不思議なのは同氏が引用したブラッドフォード・オブザアヴァー紙の記事 The lecture (we read), "attracted....." 云々は彼自から同上括弧内の第二註によつて其の脚註を見ると Bradford Observer, March 3, 1858 より引用された事となつてゐる。併しそれは同氏が其の少し前の所にラスキンが一八五九年二月廿一日にマンチエスタアに到着する前父に當てた手紙を納め又二十二日に行はれた講演に就いて同日附の書簡をも載せ更に彼が同所よりブラッドフォードへ赴いた事及び同三月一日に年代順に云へば第五番目、The Two Paths に納められた順序で云へば第三番目の講演を爲した載せてあるのをみれば上記の 1858 年は恐らく 1859 年の誤植であらう。些々なる事ではあるが筆者は八年を九年に訂正して前にのせた故に之れを附記しておく。）又其の講演の内容に依つても其

が社會的地位を有する者の面前でなされたものであるのを窺ひ得ると共に吾々は之れに依つてラスキンがこゝで所謂製造業者、一般的に云へば資本を投じて工業生産を企畫する者に非常に大なる責務を負はせてゐるのを認める事が出來る。

即ち彼は凡ての製造家の第一目的は單に美を備へる許りでなく日常の用に適ひ且つ賤しく且つ時流に投せざる生活にも適合しうる貨物を生産する事でなければならない。故に財産に對する短見な且つ無頓着な慾望の爲め民衆の機嫌が一時的の要求の形に現はれた時之れを捕捉するに汲々たる生産者は彼等の仕事が市場を形成し其の市場に自からの製造品を供給する事に存すると云ふ意義を忘れて其の生活の全部を公衆の趣味を腐敗せしめ又其の奢侈を奬勵する事に傾注してゐるのである。斯くては『彼等を華美によつて得た凡ての名聲も其は購買者の虚榮に基くものでなければならぬ。斬新と云ふ事に依つて彼等が得たあらゆる需要は消費者に不滿と云ふ習慣を助長した。……かくて晩年彼等は自己の生活は藝術を妨げ德性を失はしめ自國の生活狀態を亂した事に成功したといふ點を反省するであらう』（前掲書第九六節參照）（Fors Clavigera, Letter xli 參照）

反對に彼等生産者が其の地位の重大を理解して何が人間にとつて最善であるかを確め其の結果を求める事の出來る樣な生産に從事するならば其の努力は各方面の善に就いて藝術の講義者よりも道德論者よりも更に有力な影響を及ぼす。

此の兩者の何れを採るかは生産者（製造業者）自からの意思によつて定む可き所であつて彼等が社會の人心に何物かを與へると云ふ點に於いては彼等は殆も著述家と等しい地位にある。人が屢々云ふ彼等の野心なるものはラスキンの眼からみれば甚だ狹小なものである。彼は是等の人々が一國を指導すると云ふ更に大なる野心を持たねばならぬと云ふ。即ち

『如何に多くの人々が一國民の嚮導であり顧問であり又支配者であり得るのに、又彼等は一國の需要を供給し乍ら其の國民の愚蒙を制限する事に精巧にして且つ偉大な利器を擁し乍ら單に一國の富裕なる商人として甘じてゐる事であらう』と。（同上第九七節參照）

附記　富める者、優れたる者が社會に對する責務に就いては同じく又 A Joy for Ever の中で社會各個の相互協力を論じてゐる中に之れを見る事が出來る。第一一五節以下及び補遺の註七參照

故にホブソンは彼獨特の英雄なるものを見出したカーライルはとにかく彼と共にデモクラシイを拒けたラスキンはその批評的態度から建設的方面に入ると大なる困難に陷つてしまつたと云つてゐる。（op. cit., Ruskin as Political Economist, p. 93）

其は兎に角、ラスキンに從へば不公正なる奢侈享樂は一國の生活狀態を攪亂するものであり又一國を滅ぼすものである。前に引用した第九六節中の註に於いてラスキンは次の樣に云つてゐる。

『若し彼等（下層階級）より上層の階級の者が彼等にその模倣す可き簡素と經濟とを與ふるならば其は結果自分等にとつても亦その導かんとする下層階級の者の爲めにも良い事となるであらう。衣裳に對する熱狂的感情や其の他歐羅巴の上流階級の心を奪つてゐる色々の綺羅は吾々の關係する所の最も危險なる政治上の一分子である。其の罪惡は既に別の機會に於いて示して置いた（Political Economy of Art, p. 62, et seq.

〔Now "A Joy for Ever," § 46, et seq.〕併し其の惡行は多くの人々の心の中には其れ程重大なものと考へられてゐない。私は彼等にこの危險を示す時が又あればいゝと思ふ。こゝでは政治上の研究に入る事は出來ないが現在上流階級の耽つてゐる浪費空費は他の近代的變革の何れよりも共和國主義をもつと早からしめるものである事は確である。煽動者、結社、所謂流行的謬想等は何れも一國の社會秩序に對して致命的な危險とならなかつたし又將來そう爲る事もなからう。上流の諸階級を覆へすものは彼等、我儘な增長した、無謀にして冷淡な自身の罪惡の外にない。斯かる罪惡に對して彼等は今や非常に多くの責を負はねばならぬ——彼等をして早くそれと覺らしめて改むる機を失する事をなからしめよ。』

富裕なる者の節制なき奢侈が社會一般の精神をあやまらせる事に就いては既に述べた。ラスキンは又同じ事を一八五二年三月に書いた Letters on Politics の中に述べて「富豪階級の奢侈は彼等自身の道德的力を知らぬ間に害ねて且つ貧困者の羨望と貪婪とを挑發する事となつて遂には十中の九までは國家滅亡の原因となる」と說いて自分は共和國主義者ではないが「凡ての歷史の最後の頁に火の如く激烈なる文字に於いて書かれてゐる眞理を認めるには何にも共和國論者の偏見を必要とはしない」と述べてゐる。

「凡ての歷史の最後の頁に火の如く激烈なる文字にて書かれたる眞理」とはラスキンに據れば一文明の極致に達して茲に極端なる奢侈に患はされて此の文明社會は其の生み出した藝術と共に瓦解滅亡してしまふに至る事を意味するのである。（Queen of the Air, § 105）

しかし斯くしてラスキンの歷史觀殊にその美術史に對する觀察に入つて行く餘裕はない。たゞ此の點に就いて二三言を附加した後この稿の結論に入らう。

藝術家が其の製作品に就いて喜びを懷くのを主眼とすれば其は常に頭腦や心情に最も致命的な影響を及ぼし最後には知力や道德的精神的本元を破壞する事になつてしまふ。嘗ては優れたる生命の偉大なる結實であり表徵であり又其の報酬であつたゴシック建築も其の極致に於いて其が建築技巧の完成を誇る程度に發展した時は茲に其の瓦解が萌した。（前揭「二つの路」第四〇節參照）

此の時代に於いては藝術は遂に奢侈と云ふ事に患はされて覆へさるゝに至つた。ラスキンは熱烈なる中世文明の謳歌者であるにも拘らずかゝる關係から次の樣に述べてゐる。即ち

『私は彼等（製作者達）の爲めに新しいピサを建設する事を求め望む者でない事を繰返へして云ふ。吾々は十三世紀ゝ生活や裝飾を再び復活せん事を望む者ではない。……如何に其の記述に於いて美しく響くも亦あらゆる點で其が事實如何に高尙なりとも中世紀のあらゆる絢爛は其の基礎に於いて、其の終局に於いて生活の矜持所謂優秀なる階級の矜より以外には何物でもなかつた。其は暴虐と掠奪とに依つて支持された矜であつて遂には藝術そのものと共にその藝術が榮えた國家の破滅を導いたものであつた（第九二節「二つの路」）

『歷史の大なる敎訓は、之れ迄のあらゆる藝術は、貴族社會の自己的權力によつて支持され又決して其の範圍を民衆の愉悅安息に及ぼさなかつた藝術は、斯くの如く用ひられ且つ育くまれて來た藝術はたゞ其が裝飾した國家の破滅を早めた丈けであると云ふ事を敎へてゐる。如何な

る王國に於いても吾々が偉大なる藝術家の勝利を指示する其の瞬間に吾々は又其の國家の衰滅の決定的時機を示す事が出來る。偉大なる畫家の名前は國家沒落の弔鐘に似てゐる。ベラスケスの名に於いて吾々は西班牙の衰滅の響を聞く、レオナルドオの名に於いてミランの滅亡を、ラファエルの名に於いて羅馬の瓦解の響を聞く。而して斯く茲に深遠なる正義が存在する。蓋し用ひられる力の尊貴なるに從つて其が無益な或は有害なる目的に使用せらるゝ爲めには益々甚しき罪惡を犯す。今までの藝術は偉大なる程矜持の裝飾（其が宗教的又は世俗的の矜で或は寺院であらうが宴會場であらうが其は問題ではない）の爲めに或は淫蕩的氣分の誘發の爲めに的確に用ひられ又其れのみに使用されて來たのである。……』（同九三節參照）

かくてラスキンは吾々にとつては他の路が開かれてゐる、吾々には最早大理石の王座も金の圓天井も必要がない、吾々にとつては藝術の力と魅力とを賤しき者や貧しき者の手の達く距離に齎す可き、遙かに高尚にして且つ愛す可き特權を有してゐる、過去の壯大なる藝術が其の偏狹と矜持とに因つて失敗したに對して吾々の藝術は其の普遍と平易とを以つて榮え永續せしめよと叫んでゐる。

五

以上述べた所に依つて吾々はラスキンの奢侈否定の一面を略ぼ窺ひ得た。不義の行爲を以つて蓄積せられた富に依つて、單に正しき使用の律則に遵はざるのみならず、社會に於ける緊切なる必要品の生産を妨げ又社會秩序に混亂を齎し延いては其の社會の滅亡を招く富者の傲慢なる奢侈生活の罪惡をラスキンは悽慘なる言葉を以つて指摘してゐる。

華美なる衣裳を纏ふて歡樂に耽ける彼等は一度其の誤れる心情の闇を除かれた時、其處に正しく死と結託したる自分及び他を掠奪して得たものを身に纏へる自分の姿を見出すであらう。（以下原文の儘を左に抽出しやう）

"Yes, if the veil could be lifted not only form your thoughts, but from your human sight, you would see—the angels do see—on those gay white dresses of yours, strange dark spots and crimson patterns that you knew not of—spots of the inextinguishable red that all the seas cannot wash away; yes, and among the pleasant flowers that crown your fair head, and glow on your wreathed hair, you would see that one weed was always twisted which no one thought of—the grass that grows on graves. (A Joy for Ever, § 53)

一國民の窮貧は彼等が食物、住屋、衣服及び燃料の必要を感じてゐると云ふ事を意味する。故に吾々が勞働者を食物の生産に家屋の建造に衣服の調製に燃料の供給に使役するならば其は決して惡い事ではない然るに吾々が何ものをも生産しない樣に勞働者に使役するならば其は常に惡い事である。蓋し此の場合には外の勞働者が彼を養ふ爲めに二倍の時間働かされなければならぬから。今日吾々は勞働者に美術品や奢侈品を作らせ又其の勞働者は外に何物も作らないがかくては吾々は一般に惡を犯してゐるのである何故と云へば近代の美術は大部分一つの虛僞の基底の上にあるものであり又近代の奢侈は罪惡として大なるものなるを以つてゞある。(Munera Pulveris, § 155)故に

『吾々が人々を働かせる仕事にもつと重要な

ものが殘つてゐない樣な適當な場合には彼等をしてレースを編ませしめ又寶石を削らし磨かせるのも正しいかも知れない。併し其處に寢床に用ふる毛布も持たぬ、彼等の身體を覆ふ襤褸さへも持たぬ者が居る間は吾々が彼等に與へる仕事は毛布を作り衣服を作る事であつて決してレースを編ませる事ではない』(A Joy for Ever, § 52) 奢侈は國民的にせよ個人的にせよ何れも有用なる事物の生産から引き拔かれた勞働に依つて拂はれねばならぬものである。故に如何なる國家も其の貧しき者の全體が愉快なる住居に住ひ充分なる食物を得る迄は奢侈に耽る可き權利を有するものではない。(Ibid., Addenda note 5)

かくて一八六〇年に現はされた著名なるかの Unto this Last の最後の一節には次の如き言葉がある。

"Consider whether, even supposing it guiltless, luxury would be desired by any of us, if we saw clearly at our sides the suffering which accompanies it in the world. Luxury is indeed possible in the future—innocent and exquisite; luxury for all, and by the help of all; but luxury at present can only be enjoyed by the ignorant; the cruellest man living could not sit at his feast, unless he sat blindfold. Raise the veil boldly; face the light; and if, as yet, the light of the eye can only be through tears, and the light of the body through sackcloth, go thou forth weeping, bearing precious seed, until the time come, and the Kingdom, when Christ's gift of bread and bequest of peace shall be Unto this Last as unto thee; and when, for earth's severed multitudes of the wicked and the weary, there shall be holier reconciliation than that of the narrow home, and calm economy, where the wicked cease—not from trouble, but from troubling—and the Weary are at rest.

六

以上長きに亘つて、現在に行はれる奢侈に對するラスキンの非難を擧げて來た筆者は右に述べた眞の奢侈即ち萬人の爲めに、萬人の協力に依つて求められる奢侈に就いてのラスキンの見解を紹介して此の稿を終へたいと思ふ。

良き家婦に對して、彼女の家政の眞摯なるに就いて尊敬を拂へど更に其の微笑によつて彼女の最もよき性情を認めんとする (A Joy for Ever, § 10) ラスキンは奢侈の種類を五つに分ちて其の何れもの必要を說いてゐる。

既に再三筆者が利用したラスキン全集中第二拾二卷の卷尾には附錄として其の編纂者 E. T. Cook 氏によつて Notes for Oxford lectures が加へられてゐるが其の第二 Notes for the lectures called "Readings in 'Modern Painters.'" の第四講はラスキンが自から次の如く Unto this Last の內容を明かにしたもの ("Contents of Unto this Last") であつて前に揭げた其の最後の章句の內容を布衍したものである。此の講演は一八七七年十一月十三日の日附であるが其の前回の講義の後を承けて "Luxury, innocent and exquisite—luxury for all; and by the help of all" を以つて始められ之は從つて "Luxury, innocent, because granted to the need of all; and exquisite because perfected by their aid" と說明せられるとなしてゐる。(Complete Works, XXII 516-518 pp.)

奢侈は凡べての人にとつて必要なるものであ

つて富める者と等しく貧しき者にも之れを必要とする。其は而して次の如き五つの順序に於いて必要とせらるるのである（All men have need of it—the poor as the rich—and need of it in five orders or heights—）。

第一に運動に於ける奢侈第二は食物に於ける奢侈第三は衣服に於ける奢侈第四は聽く事の奢侈第五は視る事の奢侈である。以下之れをラスキンの云ふ所に從つて説明して行かう。

（一）運動に關する奢侈又は完全に云へば勞働並びに安息に於いての奢侈。即ち吾々の四肢の自由なる活動に對する健全な刺戟を加へ又長時間歩行した後で清潔な敷布やラヴェンダアの上に身を横たへ又は居心地のいゝ家に憩ふ等の健全なる安息を意味する。

（二）食物に於ける奢侈　即ち吾々はよき麵麭果實牛酪肉類及び葡萄酒を有し且つ凡べて是等を賞味し得なければならぬ事を云ふ。

適當に草苺を味ひ又クリームを味ひうると云ふ事は一つの德（virtue）であり又其れ故に一つの必要である。吾々が此の方面の充分なる奢侈を知らなければ吾々は完全な人間ではない、多くの人々は豚や黑鳥の樣に是等のものを貪り喰つてゐる。

（三）衣服の奢侈　充分に且つ整ふた衣服を纏つてゐると云ふ感じ又外の人々が吾々を跳めて好感を持ちうると云ふ事の感じに歡びを求める事であつて之は優美な奢侈にして且つ主として婦女の特典であり彼等の德である。又美しい少女が纏ふてゐる奇麗な衣服から顯はされる所の誠に清淨なる快感が如何に夥しいものであるかは驚嘆に値する。

（四）聽く事に於いての奢侈は即ち音樂又は文學或は是等の關係したものであつて之れに就いては贅言を要しない。次に

（五）視る事に關する奢侈は智識に訴ふる所ある樣な繪畫及び其他之れの關係のあるものの奢侈であつて是等最後の二つの奢侈は勿論前の三者よりも遙に崇高なものであるが殊に視る事に關する奢侈は最も廣汎なもので更に高尚な位地を持つてゐる何故かと云へば音樂と繪畫の間には、一方は神が地上に於いて大部分吾等自から歌ふのに委せられたのに對して他方では神自からが吾々の爲めに描いて與れてゐると云ふ相違があるからである。

是等の凡べての奢侈は既にUnto This Lastの結句に於いて述べられた樣に凡べての人々に許し與へられ又凡べての人々の力によつて完成される可きものである。吾々は製絲場の娘達に運動の歡喜と安息の爽快なる氣分とを持たしめなくてはならない。吾々は健全な麵麭や牛乳や果實を勞働者の子供達に、美しき衣服を彼の妻や娘達に與へる可きである。就中吾々は聾者に聽く事の奢侈を與へ盲目なる者に視る事の奢侈を與へなければならない。かくて、勿論之は精神的意味に於いてゞはあるが、初めて彼等の塞されてゐた牢獄の解放が行はれるのであるとラスキンは信じてゐる。

かくて人々は豐滿と美との環境の内に生活するに至るべく美の結實は是等の人々の情操と知力と技能との合致によつて創造され茲に社會は美と生命の躍動のうちに其の幸福なる存在を保つ事となるであらう。（完）